春の夢

宮本輝

文春文庫

文春文庫

春の夢

定価はカバーに
表示してあります

1988年2月10日　第1刷
1994年4月20日　第15刷

著者　宮本輝
発行者　堤　堯
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211
落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。
印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-734803-9

文春文庫

春の夢

宮本輝

文藝春秋

春の夢

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

＊初出

「文學界」（「棲息」改題）

一九八二年一月号より一九八四年六月号まで、二十回にわたり掲載された。

＊参考文献

リチャード・ゴリス著『日本の爬虫類』（小学館　一九六六年刊）

＊単行本

一九八四年十二月文藝春秋刊

一

夕暮れの道に桜の花びらが降ってきた。桜の木などどこにも見あたらない商店街のはずれだったので、井領哲之は、それが誰かのいたずらで、自分の体めがけて撒き散らされた小さな汚物みたいな気がして、頭上のあちこちをかすかな怯えのまじった目であおいだ。

商店街からの一本道を行くと踏切りがあった。踏切りを渡ると、道は曲がりくねり始め、いつのまにか小さな川に沿って進んでいた。十分ばかり歩いたところで、川は右に曲がっていき、またまっすぐの道が前方の生駒山に向かって伸びていた。酒屋があり、雑草の生い茂った空地があり、店を閉めてもう何カ月もたったような喫茶店の看板が、冬に逆戻りしたみたいな冷たい風にあおられて音をたてていた。そこからアパートまではまだ二十分もかかった。雑貨屋と床屋が並んでいるところを右に折れて、安普請の新興住宅が密集している一角に、井領哲之の借りたアパートが建っていた。彼は友人の運転してくれる小型トラックに荷物を積んで、ついさっき大阪の福島区から、この大東市のはずれのアパートに引っ越してきたばかりであった。

アパートの持ち主は敷金と前払いの家賃と引き換えに部屋の鍵をくれた。荷物といっても古ぼけた座机がひとつ、小型テレビ、冷蔵庫、母が嫁入りのときに持ってきたという年代物の桐の箪笥、蒲団が一組、あとは自炊に最小限必要な食器やフライパンや鍋などで、トラックから二階の部屋に運ぶのに、十五分もかからなかった。友人は仕事があるからと言ってすぐに帰っていき、哲之がひとりで、荷物を片づけ始めたとき、室内に電球がひとつもないことに気づいた。彼はアパートの持ち主の家に行って、電球はないのかと訊いた。

「前の人が出ていきはるとき、持っていきはりましてん。すんませんねェ」

アパートの持ち主は、ごみごみした住宅地の中にちっぽけな美容院を営んでいる四十過ぎの女で、口には出さなかったが、電球は自分で買ってつけてくれと言わんばかりに、客の頭をブラッシングしながら、それきり哲之を見ようともしなかった。電球などは持ち主がつけるべきではないかと思ったが、いかにも吝嗇家らしい女主人の顔つきを見て、哲之は仕方なく駅まで歩いて、六十ワットの電球を二個と、六畳の部屋に灯す蛍光灯を一個買って帰って来たのである。

陽はほとんど落ちて、室内にはうっすら青味がかった夕暮れの色がひろがっていた。彼は衣類を入れたダンボールの箱から、誕生日のプレゼントとして陽子から貰ったテニス帽を捜し出し、まずそれを掛けておくところをつくろうと思った。哲之は電球をねじ込んでスウィッチをひねった。明かりは灯らなかった。蛍光灯をセットしてスウィッチを入れたが、それもつかなかった。哲之は部屋を出たところの壁に取りつけてある電気メーターを見た。電力会社の札がぶらさがっていた。哲之はまたアパートの女主人の経営する美容院まで行った。

「電気がつけへんのですけど……」
女主人は、ちらっと哲之を見て、
「いやっ、忘れたわ、電気会社に連絡するのん。メータのとこのスウィッチ、切ったままやねん」
と言った。
「今晩、真っ暗な中で辛抱せんとあかんのですか」
哲之は腹が立ったが、穏やかに言った。
「あとで、ローソク持って行ってあげますさかい、ひと晩辛抱してちょうだい」
哲之は暗い部屋に帰り、畳の上に坐り込んで、仕方がない、とにかく家賃七千五百円だからなと思った。女主人は一万円を譲らなかったが、学生だから何とかしてくれという哲之の頼みで、しぶしぶ七千五百円にまけてくれたのである。建って十年以上たつ六畳一間の黴臭い部屋であった。
彼は部屋の中を見廻した。共同便所ではなく、ちゃんと部屋の奥に便所がついているだけ、まだましだなと思った。部屋の隅に座机を置き、その横に簞笥を並べた。蒲団を狭い押し入れにしまい、台所に食器類の入ったダンボールをひとまず置くと、ペンチや釘や、カナヅチの入っている道具箱を出した。哲之は短い釘を捜したが、部屋の中はもう真っ暗で、五センチ以上の釘しかみつからなかった。簞笥を少し動かして、座机との間に隙間をつくると、壁と壁との間に露出している四寸角の柱に手さぐりで釘を打った。彼は目見当で力一杯打ちつけた。部屋が揺れ、釘を打つ大きな音が響いた。哲之はその釘にテニス帽を掛けて、暗闇の中で煙草を喫

った。すると女主人がやって来た。
「あんまりあっちこっちに釘を打ったりせんといて下さいねェ」
そう言って細いローソクを五本手渡してくれた。そして、
「ガスは出るようにしといたけど、ここらはプロパンガスやから、それ用のレンジでないとあきまへんでェ」
と言って、さっさと帰っていった。哲之の持って来たレンジはプロパンガス用ではなかった。それも新しく買わなくてはならないのか。彼はローソクに火をともし、ズボンのポケットから紙幣を出してかぞえてみた。電球を買って、ついでに駅前の中華料理店で夕食をすませたので、母から貰った金は四万七千円に減っていた。哲之はローソクの火を消し、アパートを出て、公衆電話を捜した。どこにもなかった。雑貨屋の入口にあった筈だったが、まだ七時前だというのに店はもう閉められていた。彼は通りがかった女に、公衆電話はないかと訊いた。教えられた道を行ったが、やっと電話ボックスが見えたのは、すでに十五分以上も急ぎ足で歩いた頃であった。その十五分もの道のりで、彼はひとりも人に出逢わなかった。しかも街路灯ひとつ灯っていないのである。ここはほんまに大阪かいなと、哲之は背を丸め、両手をズボンのポケットに突っ込んで歩きながら呟いた。彼は電話に出て来た陽子に、
「ここは、ゴースト・タウンや」
と言った。
「あした、学校に来る？」
陽子が心配そうに訊いた。

「あしたは、アパートで寝てる。あさってからアルバイトやから……」
と、哲之は答え、それからアパートまでの道順を教えた。陽子は黙っていた。しばらくして陽子は小声で言った。
「あした、私、行くね」
「……うん」
「何か買うて来て欲しいもんある？」
「プロパン用のガスレンジがいるんや。小さな安物でええよ」
電話を切ると、こんどは母の勤めているキタ新地の料理屋のダイアルを廻した。いまがいちばん忙しい時間だから、取り次いでくれるだろうかと心配したが、料理屋の若い女店員は愛想よく、調理場にいる母を呼んでくれた。母は哲之からの電話を待っていた様子で、夕食はすませたのかとか、足りないものはないかとか、つらいだろうが、学校にだけはちゃんと行くようにとか言ってから、
「必ず、毎日電話をかけといでや。お母ちゃん、お昼の十二時には、電話の前にいてるさかい」
とつけ足した。
「そんなにきっちり十二時にかけられへんときもあるがな」
「きっかり十二時でのうてもええ。そやけどお昼には絶対電話をかけること。わかったか……？」
「……うん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

哲之は、一点の灯もない寒い道を帰りながら、早く大学を卒業してしまわなければならぬと思った。ことしは、四課目の単位を落とし、卒業出来なかった。これ以上の留年は許されない。夏には就職を決めて、来年卒業しなければならない。就職したら、毎月一万五千円を、三年間、浪速実業金庫という会社に払いつづける約束を果たさねばならないのであった。父が死の直前に振り出した約束手形は五枚あった。そのうちの三枚は、相手がこちらの窮状をみかねて破棄してくれた。井領さんには、生前お世話になりましたからと言う相手もいたし、さんざん厭味を言ってから、哲之と母のうなだれた姿を見て、結局あきらめてくれた相手もいた。だがあとの二枚の手形の取り立ては執拗だった。一枚は浪速実業金庫に廻り、一枚は手形ブローカーに廻った。浪速実業金庫からやって来た担当者は、六十をとうに過ぎたと思える温厚な男で、

「たいした額やおまへんさかい、月賦で払(はろ)てくれませんやろか」

と言った。たいした額ではないといっても、五十四万円で、いまの哲之と母には大金だった。哲之は母に内緒で浪速実業金庫にまで出向き、自分はいま学生で、来年就職する予定であるから、それから何年間かにわたって払わせてもらえないかと、その老人に頼んでみた。話は成立し、その間の利子は計算しないこととして、覚え書のようなものに判を押した。もう一枚の、手形ブローカーに渡った三十二万三千円の六カ月手形が問題だった。話し合いとか、こちらの事情など通用しない相手で、夜中に訪れて、明け方近くまで、すごんでみせたり、優しく哀願したり、あの手この手で三カ月間、哲之と母の住む家に通って来たのである。母はそのうち気がふれたようになり、夜になると全身を震わせ始め、押し入れの中に入って朝まで出てこなかった。哲之はその間、友人の家を転々と泊まり歩いていた。一週間前、それまでひとりで訪れ

て来た男は、三人のやくざ者と一緒にやって来、玄関の戸を蹴り倒してあがり込んでくると、押し入れの中で震えていた母をひきずりだし、金を用立てなければ息子の片腕を一本貰って行くと脅したのだった。あくる日の朝、母と哲之は家財道具をまとめ、家主にわけを話して、尼崎の伯母の家にひとまず身を隠した。夫に先だたれ、年金と近くの自動車部品メーカーでパートとして働いて得るわずかな金で生活し、小さな借家でひとり住まいしている伯母は、その手形ブローカーが哲之と母の居場所をつきとめて自分の家に押しかけて来はしまいかと心配していた。哲之と母は相談の末、とりあえず別々のところに別れて住んで、やくざから逃げようということになった。知人の紹介で、母はキタ新地の「結城」という料理屋に住み込みで働くことが決まり、哲之は大東市に住む大学の後輩の口ききで、アパートのひと部屋を借りたのである。哲之は、奴等のことだから、大学の校門のところで終日待ち伏せをするかもしれないと考えて、五日前から始まった新学期の講義に一度も出席していなかった。ここまできたら、もう断じて払うものか。逃げて逃げて逃げまくってやる。哲之はそう心を決めていた。哲之はアパートの自分の部屋に帰り着くと、マッチをすった。ローソクに火をつけて、さっき柱に打ち込んだ釘に掛けてあるテニス帽を見つめた。哲之はテニス部の選手だったが、父が死ぬ少し前にテニスをやめた。もうそんな余裕などないことを知ったからだった。テニス部の仲間は、退部を申し出た哲之を引きとめてくれ、籍を残しておくから、テニスをやりたくなったらいつでも遠慮せずテニスコートに来いと言ってくれた。哲之はローソクの火がゆらめいている狭いアパートの一室に横たわり、いつまでも、陽子がプレゼントしてくれたフランス製のテニス帽を見ていた。部屋の中は、火の気がなく寒かったので、彼は早々に蒲団を敷くと、もぐり込んだ。

隣の部屋から咳が聞こえ、しばらくして電話のベルがなった。隣は電話があるのか。哲之はあしたケーキか酒かを持って隣室の住人に挨拶に行き、電話番号を教えてもらい、自分にかかってくる電話を取りついでくれるよう頼んでみようと思った。自分にかかってくる電話は、母と陽子からしかない筈で、それならば、せいぜい週に一、二回だろうから、相手も迷惑がらずに使わせてくれるかもしれないと考えたのだった。哲之はローソクの火を吹き消した。そして、あした陽子が来ると思った。久し振りに、ふたりきりになれる。

哲之は、三年前、大学の構内で初めて陽子を見たときのことを思い出した。陽子は入学して来たばかりの新入生で、哲之は二回生だった。暖かい日で、陽子は白いブラウスを着て水色のジョーゼットのスカートをはいていた。とびぬけて美しいという娘ではなかったが、表情に、どんな娘にも見られない独特のふくよかさがあった。満ち溢れている清潔感とひかえめなのびやかさが、哲之の目をいつまでも陽子に注がせた。

「あいつ、可愛いなァ」

哲之が傍らのテニス部の仲間のひとりに言うと、

「早い者勝ちやぞォ。ラグビー部の山下が狙ってるし、空手部にも三人ほど、あいつに惚れてるやつがおる」

そんな返事が返ってきた。

「俺、あんな娘が好きやなァ……」

「早いこと口説けよ。お手並拝見させてもらいやしょう」

哲之は食べかけのラーメンを置くと、学生食堂に入って来た陽子に近づき、うしろから肩を

叩いた。振り返った陽子は怪訝そうに哲之を見つめた。

「テニス部に入りませんか」

と哲之は言った。陽子は顔を赤らめて、そんな気はないと申し訳なさそうに断った。

「テニス部に入れというのは口実で、じつはフランス語のノートを貸してほしいんです。ぼくは二回生ですけど、フランス語の単位を落として、ことしもういっぺんフランス語を受けんとあかんのです。ところがフランス語の講義にはいっぺんも出たことがない。頼みます。これからずっと、フランス語のノートを写させてくれませんか」

ありふれた、何とも下手くそな近づき方だなと、哲之は喋りながら自己嫌悪に陥っていた。けれども陽子は快くノートを貸してくれた。二週間後、ふたりは梅田の喫茶店で待ち合わせをして、それから映画を観た。何日か後、陽子の家に遊びに行き、食事を御馳走になった。その夜、駅まで送って来た陽子の唇に自分の唇を合わせ、薄いブラウスの上から乳房をまさぐった。

哲之は、あした、きっと自分たちは蒲団の中でひとつになるだろうという予感がした。哲之はまだ女を知らなかったし、陽子も、哲之に乳房を触れさせるだけで、それ以上のことは許そうとしなかった。哲之は、食べ物やケーキやガスレンジを持って、知らない町の長い道を歩いてくる陽子の姿を空想した。陽子を悲しいめにあわせたりしてはいけないと思った。陽子は、下司っぽい部分を、ただのひとかけらも身に帯していなかったし、まったくと言っていいくらい、世間ずれしていなかった。哲之は、陽子の何も身にまとっていない姿を見たかった。「あした、私、行くね」。陽子の言い方は、何かを暗示していた。哲之は心の中で裸の陽子を抱いた。そうやって眠った。

翌朝、目を醒ました哲之は、部屋の鍵を外して、また眠った。次に目を醒ましたとき、陽子が蒲団の横に坐って哲之の顔を見おろしていた。逢いたくてたまらなかった陽子が来た。陽子は俺を起こさずにじっと寝顔を見ていたのだ。そう思うと、哲之はたとえようもない幸福感に包まれて、陽子と見つめ合っていた。彼は蒲団の中から手を差しのべて陽子の頬を撫でた。陽子が笑った。

「私、来たよ」

と陽子は子供をあやすみたいに囁いた。

「いつ来たの？」

「二十分くらい前」

「起こしたらよかったのに」

「なんで、こんなに哲之のことが好きなんかなァって考えてたの。哲之、ハンサムでもないし、汚ない靴履いてるし、私に何にもプレゼントしてくれへんのに」

「俺、ハンサムやぞォ」

「見ようによってはね……。哲之の顔はかわってるのよ」

陽子は色が白く、目の下に少しだけそばかすがあった。

「どこがかわってる？」

「口で言われへんくらいかわってる」

「気持の悪い顔なんやなァ……」

くすっと笑うと陽子は自分の頬にあてがっている哲之の手を握った。

「哲之の顔、好きよ」
陽子は自分から抱きついてきた。陽子の頬は冷たかった。
「八時に家を出たのよ。武庫之荘の家からここまで二時間もかかってんから」
陽子は哲之の唇を柔かく噛みながら囁いた。それからなじるように言った。
「寒いのに、ストーブもあれへん」
哲之は陽子を蒲団の中にひきずり込むと、長い間、自分の手で陽子の頬や背や肩を強く撫でさすってやった。哲之は蒲団から出て、顔を洗い、歯を磨き終えて振り返ると、驚いて陽子を見つめた。陽子は服を脱ぎ、小さな下着一枚の姿で背中を向けて蒲団の上に正坐していた。陽子は両の手で乳房を隠し、首だけ廻して哲之を見た。陽子は満面に恥じらいをたたえて、かすかに微笑んだ。哲之が陽子の表情の中でいちばん好きな、あどけなさと、どこかに淡い色香を放つ微笑であった。哲之が横に坐ると、陽子は、
「……寒い」
と言いながら横たわり、蒲団をかけてくれと囁いた。哲之は、すでに陽子が身にまとっているものを自分から脱いだというのに、強い羞恥心に襲われて、正坐したまま無言で陽子の顔を見ていた。彼はそんな自分に気づくと、パジャマを脱ぎ、下着も取って全裸になった。まだカーテンもつけていない窓からは、午前の陽光が眩しく差し込んでいた。暗くしてくれと陽子が言った。哲之はカーテンの代わりに、蒲団を包んでいた大きな布を窓のところに持って行き、押しピンでとめた。部屋に鍵をかけて、暗くなった古びて汚ない部屋に敷かれた男臭い蒲団の中で、怯えと、いつもよりいっそうふくよかな微笑とがないまぜになった表情で自分を待って

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com